# 高等学校国語総合　現代文教材の内容

国語総合

## 一　評論一

●**ありのままの世界は見えない**（田中真知）　認識論

同じ風景や映像を見ていても、その記憶や解釈が人によって異なるのはなぜか。「見る」という行為が経験と知識に基づいて学習するものであり、人はその約束ごとに従って作りあげられた「世界」を見ていることを、映画を見て予想外の感想を話した人々の逸話などの具体例をあげて解説する。

●**水の東西**（山崎正和）　比較文化論

鹿おどしと噴水から連想される西洋と日本との文化の違いを、「流れる水と、噴き上げる水」「時間的な水と、空間的な水」「見えない水と、目に見える水」といったキーワードを用いながら、二項対立の形式でわかりやすく説明する。

## 二　小説一

●**羅生門**（芥川龍之介）

『今昔物語集』に収められた「羅城門登上層見死人盗人語第十八」の逸話に想を得て、平安時代の荒廃した都を舞台に、生きるために自らの悪行を正当化しようとする老婆と下人の姿をとおして、人の心のありようを描く。近代短編小説を代表する作品。

●**神様**（川上弘美）

「わたし」は、マンションの三つ隣の部屋に引っ越してきた「くま」に誘われて、近くの川原まで散歩に出かける。「大時代なうえに理屈を好む」が礼儀正しく紳士的な「くま」の言動に、ときおり入りこむ彼が熊であることの不思議さとおかしさ。どこにでもありそうな一日を、現実と非現実の境界を漂いながら淡々と綴る物語。

## 三　評論二

●**ネットが崩す公私の境**（黒崎政男）　メディア論

かつてニーチェが「誰もが読むことができるという事態」が「書くことばかりか、考えることまで腐敗させる」と述べてから一世紀がたった。インターネットが生んだ「誰もが著者となる時代」の今、その功罪と課題を、書き手と読み手・情報の質と量・〈発想〉と〈発表〉などの関係を例にあげ、鋭く指摘する。

●**ものとことば**（鈴木孝夫）　言語論

全ての「もの」には名前がある。だから、はじめに「もの」があり、そこへ「ことば」によって名前が与えられないと考えがちだ。しかし実際は、「ことば」が与えられない「もの」は、世界に存在しないように見えるだけである。「ことば」のはたらきとその虚構性を、「もの」との関係をとおして論証する。

●**クマの棲める森**（鷲谷いづみ）　環境論

餌を求めて人間の生活圏に入りこむ熊たち。熊と人間、双方の損害と犠牲を減らすには、棲む場所を分けることが最も確実な方法である。人間と熊との共生を目指す中で、見えてきたのは「自然再生」の必要性。生物多様性に満ちた森を育てることは、熊だけでなく人間を含めた生物全体の再生にもつながることを説く。

〈いま〉を読む

●**子ブタと未来**（中村安希）　国際交流論

ケニアの安宿で手にしたノートをきっかけに、ウガンダの孤児院を訪ねた筆者。経営者の夫人や子どもたちとふれ合い、彼らに「何がいちばん必要なのか?」を問い続け、都市と農村の貧困の実態や子ブタのもつ可能性、そして絶対的に必要なものに気づいていく。国際貢献で真に大切なことを、率直な筆致で綴る。

●**生物と無生物のあいだ**（福岡伸一）　生命論

生命は一度きりで不可逆の営みの中で「動的な平衡」を保っており、「これを乱すような操作的な介入を行えば、動的平衡は取り返しのつかないダメージを受ける」。気鋭の生物学者が、人間と自然・生命との関わり方についての自らの考えを形成する根幹となった、幼少時の二つの体験を述べる。

## 四　詩歌

●**鯉のうへ**（三好達治）

「あはれ花びらながれ／おみなごに花びらながれ……」桜の花びらが舞う、み寺の境内の春の情趣と、そこを歩く、孤独な影を引く詩人の憂愁の思いを語る。

●**死なない蛸**（萩原朔太郎）

飢餓に耐えかねて自分の身体を食い尽くしてしまう蛸を寓意的に描き、孤独な生の渇望や、充たされないことへの絶望感を表現した散文詩。

●**サフラン**（新川和江）

地に低く、しかし、空に向かって凛と咲くサフラン。その姿に、孤独を乗り越える希望を見いだす……。「たくさんのさびしさよ／サフランとなって咲きなさい」という呼びかけがやさしく響く。

●**崖**（石垣りん）

第二次世界大戦末期、サイパン島で追いつめられ崖から飛びこまなければならなかった女たちの悲劇は、未だ終わっていないことを告発する。

●**その子二十——短歌二十首**

与謝野晶子・斎藤茂吉・北原白秋・石川啄木・近藤芳美・寺山修司・河野裕子の作品を三首ずつ収録。

●**いくたびも——俳句二十一句**

正岡子規・高浜虚子・種田山頭火・橋本多佳子・中村草田男・山口誓子・飯田龍太の作品を三句ずつ収録。

●**今日の短歌**

佐佐木幸綱・小野茂樹・俵万智・渡辺松男・東直子の作品を収録。

●**今日の俳句**

坪内稔典・長谷川櫂・小澤實・夏石番矢・黛まどかの作品を収録。



## 五　小説一

●**灰色の月**（志賀直哉）

第二次世界大戦終結から間もない東京。山手線に乗った「私」は、座席で体を大きく前後させながら眠る少年工と隣り合わせる。列車が揺れた拍子に寄りかかってきた少年を反射的に押し返した「私」は、その体が驚くほど軽いことに気づく。街も人も敗戦から立ち直りゆく中に、深く残る飢えという爪痕が浮かびあがる小編。

●**待ち伏せ**（ティム・オブライエン／村上春樹訳）

ヴェトナム戦争で体験した肉体も精神も極限の中での行為。「自分が何もしなければ、あの若者には別の未来があったかもしれない」という思いが、時間が経過してもふとした日常生活の中で「私」を襲う。実際に経験をした人間だけが語れる、敵も味方も、正義も悪もない「本当の戦争の話」。村上春樹訳で贈る戦争文学の傑作。

## 六　評論三

●**余暇について**（内山節）　社会論

「脱労働＝余暇」と捉え、さまざまな「時間を短縮する機械」をつくり出し、時間を合理的に管理することで余暇を生もうとする取り組みは、結果として人に何をもたらしたのか。「労働が労働時間の消費になり、今余暇もまた余暇時間の消費に変わろうとしている」現代における、自由で満ち足りた創造的な時間とは何かを問う。

●**「もの」の科学から「こと」の科学へ**（池田清彦）　科学論

二十世紀が「『もの』の科学」の時代だったとすれば、二十一世紀は「『こと』の科学」の時代になるはずだ。厳密性と普遍性を追求する「もの」の科学に対して、「こと」の科学には個別性と多様性への目配りが必要となる。あらゆる要素が絡み合い複雑化する現代社会において、求められるものの見方・考え方を提起する。

●**マルジャーナの知恵**（岩井克人）　経済論

「アリババと四十人の盗賊」に登場し、機転でアリババの危機を救う賢女「マルジャーナ」。その行為には、「資本主義の基本原理」と「現代の資本主義の中心原理」の本質とが隠されていた。現代資本主義から見えてくる「ノアの洪水以前から存在していた資本主義と経済機構の秘密」を、古典説話を用いて巧みに解説する。

〈いま〉を読む

●**なぜ私たちは労働するのか**（内田樹）

「やりがいのある仕事」を求め、「自己実現」や「適正な評価」や「クリエイティヴ」を夢見て、離職・転職を繰り返す若者は数多い。だがそれは、受験勉強とアルバイトが涵養した、本質の欠如した労働観の産物にすぎない。個人の努力と集団の利益との関係を手がかりに、働くことの意味と理由を喝破する。

●**夢は何語で見る?**（多和田葉子）　比較文化論

複数言語を操るがために「夢は何語で見るのか」という質問に悩まされる筆者は、その問いに対抗する小説の取材と執筆のため、南アフリカ共和国の都市ケープタウンに向かう。そこで目の当たりにした、同じニュースが十一もの言語で報道される様子から筆者が想起した、多言語社会のもつ可能性と想定される課題とを語る。

## 七　小説三

●**富嶽百景**（太宰治）

静岡の十国峠から見た高い富士。東京のアパートから見た「クリスマスの飾り菓子」の富士。山梨の御坂峠から見た「風呂屋のペンキ画」の富士と、甲府の安宿の廊下から見たほおずきに似た富士。「私」の日常と富士山をめぐるいくつかのできごとを、独特のユーモアとペーソスを交え、軽やかに活写した私小説的作品。

●**夢十夜**（夏目漱石）

自分が死んだら「百年待っていてください」という女の言葉を守り、再会する日を待つ男を描く「第一夜」。鎌倉時代の仏師運慶が仁王を彫る姿を見て、自分も木から仁王を彫り出そうとする男を描く「第六夜」。作品を代表する二章を抜粋して採録。現実から解き放たれた奇想の中に、鋭い人間観察が冴える〝世にも奇妙な物語〟。

## 八　評論四

●**情報の「メタ」化**（外山滋比古）　情報論

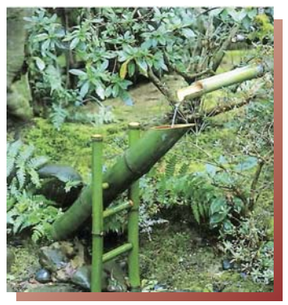
思考や知識の整理とは、量的な整理にとどまらず、抽象化を高めてより高次のものへと昇華させる「メタ化」を行うことである。ニュースのように具体的な事実のみの第一次情報は、この「メタ化」を行うことで質的変化を起こし、新たな意味をもつ。思考が具体から抽象へと変化する過程を、鮮やかに説き起こす。

●**見る——考える**（大森荘蔵）　認識論

幅のない線や広がりのない点、超多角形、極端に遅い（速い）動き、非常に小さな物体などは全て、「見る」ことはできず「考える」ことでのみ現れる。いわば、主婦が晩のおかずとして想像するコロッケと同じ性質のものなのだ。世界を認識する手段として、物事を「見る」と「考える」に大別することの有用性を示す。

●**美を求める心**（小林秀雄）　芸術論

絵画や音楽を理解するためにはどうしたらよいかという問いに、筆者は「何も考えずに、見たり聴いたりすることが第一だ、といつも答え」る。それは、「ものの美しい姿」を感じたり求めたりする心をもって、その美しさを「感ずる」ことである。近代批評の先駆者が、芸術鑑賞の極意を、平易な語り口で披露する。



「水の東西」より

国語総合